

小学校における SWPBS の効果 1

—全校児童を対象とした評価尺度における SWPBS の効果検証—

○月本 暉

大久保 賢一

大対 香奈子

田中 善大

野田 航

(畿央大学教育学研究科) (畿央大学教育学部) (近畿大学総合社会学部) (大阪樟蔭女子大学児童学部) (大阪教育大学教育学部)

KEY WORDS: SWPBS, SWPBS 第 1 層支援, 小学校

I 問題と目的

通常学級に在籍する学習面または行動面で著しい困難性を示す児童生徒が 6.5%存在しており(文部科学省, 2012)、児童生徒の問題行動が近年増加傾向にある(文部科学省, 2016)ことが報告されている。教師がそのような教育的ニーズのある複数の児童生徒に個別的に、そして同時に対応することは様々なリソースの制限から困難である場合があることが予測される。

一方、米国では、学校 SWPBS (School-Wide Positive Behavior Support)の効果が示されている(Sugai, & Honer, 2012)。SWPBS では、まず学校の全児童生徒を対象に支援を行い、その上で、十分に効果が示されなかった児童生徒に対し、順次支援を手厚くしていく。結果的に全体的な問題行動が予防されることにより、真に必要とされる個別的支援に適切な資源を投入することができるという発想である。

日本においても、SWPBS を導入することは米国と同様に効果的であると考えられるが、効果が実証された研究は見当たらない。そこで、本研究は、公立小学校を対象に SWPBS を導入し、その効果を検証することを目的とした。

II 方法

対象 公立小学校において実施した。対象校は児童 263 名、教職員が 24 名であった。また、通常学級は 6 学年 10 学級であり、特別支援学級は知的障害学級と自閉症・情緒障害学級が 1 学級ずつあり、合計 6 人の児童が在籍していた。

手続き

1. 学校目標マトリックス表の作成

第 2 発表者が、小学校で SWPBS に関する研修を教職員に対して 60 分程度行った。研修の内容は、SWPBS の概要に加えて、3 項随伴性、学校目標マトリックス表と記録、賞賛と記録の重要性についてであった。その後、教職員のみ校内研修が行われ、教職員の話合いにより児童生徒に期待する学校目標 3 つと、それを指導する場面が決定した。さらに、それぞれの目標を達成するための具体的な行動が各場面ごとに決められ、学校目標マトリックス表が作成された。校内研修の様子や学校目標マトリックス表の作成過程は、教職員によってインターネット上の掲示板を用いて、発表者らに伝えられた。発表者らは、掲示板を通し助言を行った。

2. 行動指導計画の作成

校内研修において教職員によって、学校目標マトリックス表の中で優先度の高い行動が選ばれ、行動の指導手立てが話し合われた。その後、第 2 発表者が小学校において、行動指導計画についての研修を 60 分程度行い、教職員によって優先度の高い行動の指導計画表が作成された。行動指導計画を作成した項目は、「授業が終わったら、次の授業の準備をしよう」、「予鈴を聞いたらずぐに教室にもどろう」、「友だちと話をする時は、あったか言葉を使おう」、「学年がちがっても朝や帰りのあいさつを大きな声で言おう」、「話をしている人の方へおへそを向けよう」であった。

3. 行動指導計画の実行

行動指導計画に従って、教職員によって行動の指導が行

われた。「友だちと話をする時は、あったか言葉を使おう」と「学年がちがっても朝や帰りのあいさつを大きな声で言おう」は 9 月から実施された。「授業が終わったら、次の授業の準備をしよう」、「予鈴を聞いたらずぐに教室にもどろう」、「話をしている人の方へおへそを向けよう」は 10 月の末から実施された。職員会議で定期的に、行動の指導についての共通理解や調整、指導状況の確認が行われた。また、掲示板を通して、指導の状況や行動の記録が発表者らに伝えられた。行動の記録については、発表者らがグラフ化し、掲示板を通し教職員に提供した。

III 結果

SWPBS の効果を日本語版 School Liking and Avoidance Questionnaire (SLAQ) と日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) を修正したものを用いて検証した。また、社会的妥当性を評価するために、「友だちと話をする時は、あったか言葉を使おう」と「学年がちがっても朝や帰りのあいさつを大きな声で言おう」について、教師に対してアンケート調査を 5 件法で実施した。

SLAQ と SDQ の結果をそれぞれ Fig.1 と Fig.2 に示す。SLAQ と SDQ ともに全ての項目で、SWPBS 導入前より導入後の方が、得点が有意に改善した。

また、「友だちと話をする時は、あったか言葉を使おう」と「学年がちがっても朝や帰りのあいさつを大きな声で言おう」について、肯定的な評価が多かった。負担感に関しては、「どちらとも言えない」と「そう思わない」がほとんどであった。

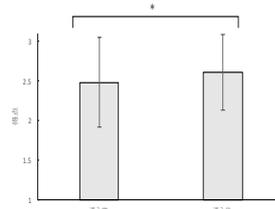


Fig.1 SLAQ の得点の変化

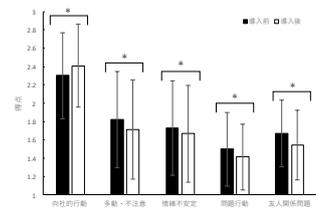


Fig.2 SDQ の得点の変化

IV 考察

SLAQ と SDQ の得点が改善したことより、日本においても、SWPBS を小学校に導入することは効果的である可能性が示された。また、教師に対して調査した、実施した 2 つの行動の指導に関するアンケート結果より、SWPBS は教師にとって受け入れやすいものであることが示唆された。しかし、統制群を設定していないことから、SWPBS の効果を厳密に明らかにすることができなかった。今後は統制群を設定し比較することにより、効果を検討したい。

文献

Sugai, G., & Honer, R., R. (2006). A promising approach for expanding and sustaining school-wide positive behavior support. *School Psychology Review*, 35, 245-259.

(TSUKIMOTO Hazumu, OHKUBO Kenichi, OTSUI Kanako, TANAKA Yoshihiro, NODA Wataru)